

# 最新緊急レポート

## また メイド 中国か!

08年6月、裁判を起こした。  
「歯科業界の中で処理されてきたことを、広く国民の前で、何が起きているのか知

ってもらいたかったので訴訟を起こしました。一番、二番とも尚早性がないとして棄却、門前払いでした。海外委託には一切触れられていない。最高裁に上告して1年がたちますが、まだ判決は出ていません」  
08年、アメリカでは中国製の歯科技工物に鉛が含まれていることが発覚。09年にはフランスで同様の問題が起こり、中国には発注しないと仏歯科医師会が決定した。金属アレルギーを起こしやすい物質が含まれていると、皮膚病になる患者が多発。唇や足の皮など皮膚の弱いところが全部むけてしまう。金属を溶かし型に合わせる時、作りやすくなるために使われたベリリ

ウムには発ガン性がある。このような情報を、むろん歯科医とて知っている。しかし利益のために中国への発注を躊躇しない。そこにモラルの低下を見ると同時に、歯科医の置かれた厳しい環境を訴える声もある。  
広島県のトリプルエーブラステントルクリニクスの辻野哲弘院長は、患者の健康保険内で治療する歯科医の悲惨な現状を説明する。  
「歯科医が劇的に増えたため1人あたりの取り分が減っているんです。患者をどんどん増やしている勝ち組と、どんどん減らしている負け組に分かれてきた印象があります」  
歯科技工物の輸入に関し、厚労省はどこで作ったものかを追跡できるように話し合いが持たれているというが「どれだけ効力があるのか?」と、

前出の須藤さんは疑問だという。  
歯科医のモラル向上、報酬点数の引き上げなど大きな改革が必要になるが、歯痛は待ってられない。当面の防衛策は、私たちが納得のうえで歯科医を選ぶよりほかにない。  
「不審に思うことがあれば我慢して治療を続けず、セカンドオピニオンを求め、丁寧な説明と親切な対応をしてくれて、長々と待たせない歯医者さんにかかることです」  
と前出の須藤さん。歯科医の立場から前出の辻野院長は、こうアドバイスする。  
「口コミやネット、実際に足を運ぶなどして情報収集することが大切。担当医と話して、システムや方針が合うかどうかを判断する。人間の相性もあります。自分のニーズに合わせて、ずっと診てもらいたいと思える歯科を自分で選ぶ必要があると思えます」

# あなたの歯にも毒詰め物が

義歯や詰め物など、歯科技工物の輸入が増えている。

野放し状態で持ち込まれる中には、人体に有害な危険物も。

モラル崩壊の国や歯科業界へ、怒れる現場から告発！

食べ物や衣料、家具など、日本人の生活のあらゆる部分に入り込んでいるメイド・イン・チャイナ。

毒入りキョーザ事件、鉛入りの塗料を塗った玩具の回収騒動、やせ薬の副作用による死亡事故などが報じられるたびに、商品表示を見ながら買物かごに入れるかどうか吟味するようになった。しかしひとたび記憶が薄れると、再び安さに引かれ手を出してしまふメイド・イン・チャイナ。

日本の安全基準に基づいた製品も増えているが、まったく野放しのまま日本に持ち込まれている製品もある。入れ歯、差し歯、詰め物、かぶせ物といった歯科技工物。中には、発ガン性のある有害金属が混入したものもあるという。何も知らされずに口の中に入れてしまっている患者……。

昨年2月、TBS系「報道特集NEXT」は、中国製義歯の問題点を報じた。日本で

は使用が禁止されている発ガン性のある「ペリリウム」が検出されたという。歯科界のニュースを発信する「医科歯科通信」は昨年3月23日、歯科技工問題で当時の民主党・小沢幹事長が厚労省に普処を指示したと伝えているが、進展は報じられていない。

人体にダメージを与える毒入りの歯科技工物がなぜ、水際で遮断されずに日本に入ってきてしまうのか？

歯科医療を守る国民運動推進本部の臨本代表が、日中の仕組みの違いを解説してくれた。

「日本は厚労省の管轄で、中国は日本というところの通商省の管轄。医療用具ではなく、雑貨や工業製品のような位置づけです。雑貨として輸入されるから、厚労省のチェックが一切ないまま国内に入ってきてしまう」

中国製歯科技工物は発注した歯科医のもとへ届けられ、一体どこで、どのような材料で作られたかという説明などまったく聞かされないまま、患者の口の中に納められてしまう。そうして治療が新しい

トラブルを生みだす。有害物質はゆっくりと口の中に溶け、金属アレルギーで足の皮がむけてしまうことも……。

1955年、歯科技工士法が成立した。歯科技工物を作れるのは歯科医もしくは歯科技工士だけ。その後の経済成長で患者数が増大し、歯科医は治療に専念。事実上、歯科技工士との分業が成立した。

需要と供給のバランスがとれているうちはそれでもよかったが、「バブル経済がはじけて以来、歯科業界は予想もつかない不況のあおりを受

け、崩壊寸前のところまで経済的に破綻しているんです」と、前出の臨本代表は指摘する。

加えてコンビニ並みに歯科医院が増え、競争が激化。生き残るためには、患者よりも経営が優先する。サブイバルゲームで疲弊しているのが、歯科医療現場の実態なのだ。

少しでも利益を上げ、生き残るために「ほかの産業が安さを求めて中国に部品を発注するのと同じです。賃金が安く人件費が抑えられますからね」(臨本代表)。

では、中国製ほどの程度の安さなのか。歯科医療コーデイナーの須藤哲生さんに尋ねた。

「日本の半額以下です。例えば1本10万円の差し歯を作る時、ものにもよりますが平均して制作費は日本だと2万円くらい。それが中国では1万円以下でできてしまう」

確かに安上がり。利益は上がるが、ツケは身体への負担として患者に向けられる。安かろう悪かろう、という詰め物などが、口の中に居座ることになるのだ。

再び、臨本代表の話。「僕らが日本で歯科技工士のライセンスを取るときには、身体構造から習って、准医師くらいの教育を受けたわけですから。ところが中国では、5〜6人のライセンス保持者が監督する下で、100人くらいの



いい歯科を選ぶには「技工士と仲よくして情報収集するのがおすすめ」と須藤さん

人間が流れ作業で技工物を作っている。この100人はみんな無資格ですよ。国内だと規制があるのに、海外で作ると誰が作ったのかわからないまま、チェックもされない」中国製がすべて悪いわけではない。一昨年、中国へ視察に訪れた臨本代表によると、「ドイツと合弁会社を作っているラボも一部にあります。高い技術と安い価格で、ドイツの基準に合わせた高品質な技工物を作っている」

にもかかわらず、日本には粗悪な技工物が野放しで、数多く入ってきてしまっている。

**情報収集力が騙されない鍵**

厚労省も問題は把握している。その証拠に、2005年9月8日付の歯科保健課長通知で「患者に適切に説明をしたうえで、歯科医師の素養に基づき高度かつ専門的な判断により適切に実施されること」が原則である。

要するに、歯科医が勝手にやれといわんばかり。責任の所在を丸投げしている。歯科技工士が何とおうが歯科医の裁量がすべてという状態に首をひねる臨本代表は

# 発ガン性、足の皮ズルむけに

金属アレルギー

日本の歯科技工の技術は世界でもトップレベル。しかし期待通りから定額率は著しく低いとい